

## はじめに

1996 年第 46 回大会において、「信仰と制度に関する委員会設置に関する建議案」が提出されたが、その提案理由は以下のとおりであった。

「第 36 回大会で設置され、第 44 回大会で廃止された『信仰と制度』に関する委員の活動を引き継いで、信仰告白・信仰問答(草案)、式文、憲法・規則について検討させ、必要に応じてその改正または制定を提案させるために、改めて信仰と制度に関する委員会を設置することを建議します」

建議案は可決され、こうしていれば第二期信仰と制度に関する委員会が第一期委員会活動を引き継ぐ形でその活動を開始した。そこで、委員会は当時の懸案であった『日本キリスト教会信仰の告白』の口語化問題に集中して取り組み、紆余曲折の後、『日本キリスト教会信仰の告白(口語文)』が制定されたのは 2007 年 10 月の第 57 回大会においてであった。

その後、委員会は他の諸課題、すなわち式文や憲法・規則の改定等に取り組んできたが、なお『信仰の告白』に関しても、将来の新しい信仰告白制定作業に向けて、現行信仰告白の「継承と活性化」の作業を継続してきた。その作業には、過去、日本キリスト教会内で公的ならびに個人的に発表、出版された『日本キリスト教会信仰の告白』に関する説明や解説文書等の発掘と学びも含む。そこで、委員会はまずはそれらの諸文書、諸見解をまとめることとし、2001 年第 51 回大会に『日本基督教会信仰の告白解説集』として提出したが、その過程で他の歴史的資料をも参考にしながら、将来の信仰問答作成への橋渡しともなるような、現『信仰の告白』の簡潔な解説文書を作成することとした。それはまた、成人教育や洗礼準備会などでも用いることのできるようにとの工夫から、Q & A 形式を採ることとした。

ここに提出するのは、以上のような経過と願いをもって、まとめられたものである。

2010 年 10 月  
第 60 回日本キリスト教会大会  
「信仰と制度」に関する委員会

# 目次

『日本キリスト教会信仰の告白』 文語文・口語文 .....	3
I 信仰の告白 .....	4
1 日本キリスト教会信仰の告白 Q&A1~6	
<コメント1 信条と信仰告白>	
II イエスキリストの人格と救いのみ業 .....	7
2 キリストの人格 Q&A7~12	
<コメント2 まことに神、まことに人>	
3 キリストの救いのみ業~十字架 Q&A13~17	
<コメント3 なぜ神は人となられたのかー贖罪説いろいろ>	
4 キリストの救いのみ業ー復活 Q&A19~24	
<コメント4 霊魂不滅とからだの復活>	
III 信仰 .....	17
5 神の子の選びと信仰義認 Q&A25~29	
<コメント5 神の選びと人間の自由>	
6 聖霊と聖化の生活 Q&A30~33	
<コメント6 聖霊の信仰>	
7 三位一体の神の恵み Q&A34~42	
<コメント7 、一神教、多神教、そして三一の神>	
IV 聖書 .....	27
8 神の言(ことば)としての聖書 Q&A43~47	
<コメント8 正典としての聖書>	
V 教会 .....	31
9 キリストの体としての教会 Q&A48~57	
<コメント9 キリスト教の終末論>	
VI 使徒的信仰 .....	35
10 使徒的信仰の伝統 Q&A58~63	
<コメント10 エキュメニカル運動>	
VII 使徒信条 .....	38
11 我信ず Q&A64~65	
12 父なる神 Q&A66~68	
13 子なる神 Q&A69~86	
14 聖霊なる神 Q&A87~94	
付録 .....	48
1 旧日本基督教会信仰の告白	
2 ニカイア信条	
3 バルメン神学宣言	

## 日本キリスト教会信仰の告白

(1953年10月第3回大会において制定、1985年10月第35回大会において一部改正)

我らが主と崇むる神の独子（ひとりご）イエス・キリストは、真の神にして真の人・永遠なる神の経綸に従ひ、人となりて人類の罪のため十字架にかかり・全き犠牲をささげて購（あがない）いを成就し、復活して永遠の生命の保証をあたへ、救ひの完（まっと）うせらるる日まで我らのために執成し給ふ。おほよそ神の選びを受け、この救ひの御業を信ずる者は、キリストに在りて義と認められ、功なくして罪の赦しを得、神の子とせらる。また父と子とともに崇められ礼拝せらるる聖霊は、信ずる者を聖化し、御意（みこころ）を行はしむ。この三位一体なる神の恩恵によるにあらざれば、罪に死にたる人、神の国に入ることを得ず。新旧約聖書は神の言にして、そのうちに語り給ふ聖霊は、主イエス・キリストを顕示し、信仰と生活との誤りなき審判者なり。教会はキリストの体、神に召されたる世々の聖徒の交りにして、主の委託により、正しく御言を宣べ伝へ、聖礼典を行ひ、信徒を訓練し、終りの日に備へつつ主の来り給ふを待ち望む。いにしへの教会は聖書に拠りて左の告白文を作れり。我らもまた使徒的信仰の伝統に従ひ、讚美と感謝とを以てこれを共に告白す。

我は、天地の創造主（つくりぬし）、全能の父なる神を信ず。我は、その独子、我らの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりてみごもられ、処女（おとめ）マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦難（くるしみ）を受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死者のうちより復活し、天にのぼりて全能の父なる神の右に坐し給ふ、かしこより来りて、生ける者と死にたる者とを審き給はん。我は、聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交り、罪の赦し、体の復活、永遠の生命を信ず。アーメン

## 日本キリスト教会信仰の告白(口語文)

(2007年10月第57回大会において制定)

わたしたちが主とあがめる神のひとり子イエス・キリストは、真の神であり真の人です。主は、神の永遠の計画にしたがい、人となって、人類の罪のため十字架にかかり、完全な犠牲をささげて、贖いをなしとげ、復活して永遠のいのちの保障を与え、救いの完成される日までわたしたちのために執り成してください。

神に選ばれてこの救いの御業を信じる人はみな、キリストにあつて義と認められ、功績なしに罪を赦され、神の子とされます。また、父と子とともにあがめられ礼拝される聖霊は、信じる人を聖化し、御心を行わせてくださいます。この三位一体なる神の恵みによらなければ、人は罪のうちに死んでいて、神の国に入ることはできません。

旧・新約聖書は神の言であり、そのなかで語っておられる聖霊は、主イエス・キリストを顕かに示し、信仰と生活との誤りのない審判者です。

教会はキリストのからだ、神に召された世々の聖徒の交わりであつて、主の委託により正しく御言を宣べ伝え、聖礼典を行い、信徒を訓練し、終わりの日に備えつつ、主が来られるのを待ち望みます。

古代の教会は、聖書によって次のように信仰を告白しました。わたしたちもまた、使徒的信仰の伝統にしたがい、讚美と感謝とをもってこれを共に告白します。

わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます。わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女マリヤから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府にくだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇つて、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審かれます。わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。

# I. 信仰の告白

## 1 『日本キリスト教会信仰の告白』について

Q 1 「信仰の告白」とは何ですか。

A 「信仰の告白」とは、神の言に対して公になされる信仰の応答行為のことですが、一般的には、世々の教会が聖書に基づいて定めた信仰の規範を文書化したものを指します。

マタイ 16:15～18/I コリント 3:10～11/ピリピ(フィリピ)2:10～11/  
ヘブル(ヘブライ) 4:14/II テモテ 1:13/cf. テトス 2:1

Q 2 なぜ、信仰は公に告白されなければならないのですか。

A 信仰は神の言に対するわたしたちの全人的な応答ですから、信仰をただ内面の問題として、外的なあり方と分離させてはいけません。まことに、わたしたちは心で信じたことを公に告白して神に栄光を帰し、人々の前で神の証人となるよう召されたのです。

マタイ 10:32/使徒 1:8/ローマ 10:9～10/I テモテ 6:12/I ヨハネ 1:9、  
4:15/ピリピ(フィリピ)2:10～11/ヤコブ 2:14/II テモテ 1:8/cf. I ヨハ  
ネ 4:2、15

Q 3 聖書のみを権威とする教会が、聖書と並んでキリスト教信仰の規範ともなるべき信仰告白文書を保有するのはなぜですか。

A 深い森を迷わず進むために地図が必要なように、聖書を正しく読むためには信頼できる確かな道案内が必要です。信仰告白文書はそのような道案内として、教会の信仰を個人的きまぐれや党派的逸脱から守ります。

Q 4 聖書と信条・信仰告白の関係はどうなりますか。

A 聖書がキリスト教信仰の第一の規範として、信条・信仰告白を「規範する規範」です。それに対して信条・信仰告白は、聖書に従属する第二の規範として、聖書によって「規範される規範」です。

- Q 5 『日本キリスト教会信仰の告白』はいつ作られましたか。
- A 1951年に設立されたわたしたちの教会は、1890年の『日本基督教会信仰の告白』を継承して出発しましたが、1953年に自らの教会の信仰と特色をより明確にするために『日本キリスト教会信仰の告白』を制定しました。さらに、2007年には『日本キリスト教会信仰の告白(口語文)』を制定しました。

\*『教会員の生活』2-1-7、2-2-1参照。

- Q 6 『日本キリスト教会信仰の告白』の特色は何ですか。
- A この告白は、形式的には、「簡単信条」と呼ばれ、個人の暗唱に適しているとともに、主日礼拝の中で礼拝者が共に声を合わせて告白できるように工夫されています。内容的には、1890年の『日本基督教会信仰の告白』に言い表された信仰を批判的に受け継ぐもので、聖書の信仰を簡潔に要約した古代教会の『使徒信条』に、宗教改革の改革教會的信仰を要約した前文を附したものとなっています。

\*『日本キリスト教会憲法』2-3；『教会員の生活』2-2-1参照。

## コメント1

### 「信条と信仰告白」

一般に、「信条」(シンボルム)とは古代教会において口頭や文書によって伝授されたキリスト教の基本的な教えを、また「信仰告白」(コンフェッショ・フィデイ)とは宗教改革期以降に生み出された信仰告白文を、指します。代表的な信条・信仰告白としては、古代では4つの基本信条、すなわち「使徒信条」(2世紀に遡る?)、「ニカイア信条」(325年)、「アタナシウス信条」(420~50年?)、「カルケドン信条」(451年)が、そして宗教改革期のものでは「アウグスブルク信仰告白」(1530年)、「ジュネーブ信仰告白」(1536年)、「スコットランド信仰告白」(1560年)、「第二スイス信仰告白」(1561年)、「ウェストミンスター信仰告白」(1647年)などが、そして現代のものでは「バルメン神学宣言」(1936年)が有名です。その他、問答形式でキリスト教信仰を簡潔に表現したも

のとしては、「ハイデルベルク信仰問答」(1563年)などがあります。

ところで、日本キリスト教会憲法第2条3項は、「(日本キリスト教会の)信仰の告白は、使徒信条、ニカイア信条、ハイデルベルク信仰問答、ウェストミンスター信仰告白、1890年に制定された日本基督教会信仰の告白に言い表されている信仰を継承している。」と述べています。これは、「私たちの教会が使徒的な、正しい伝統に立った、信仰を告白するものの群であることを表明し、福音主義プロテスタント教会の立場を明確にしたもの」と言うことができるでしょう。もっとも、教会の立場を明確にしても、「それが内容的にいきいきとした告白とならず、一片の形式であったなら、それは告白的教会と言うことはできません。教会の信仰告白は、生命をかけて、日々の生活の中で告白し、これによって立ちもし、倒れもする、決定的な信仰の旗印であり、これに基づいて、福音の宣教が活発になされて行く教理の源泉なのです」。その意味で、わたしたちの教会は、「伝統的信条の上に立ちつつも、常に現在、此の場所に於ける告白を持つのです」。(以上の引用はすべて『教会員の生活』、1955年)

さて、現代は伝統的な信条・信仰告白をおうむ返しに繰り返すだけでなく、歴史における新しい宣教状況を意識し、それに対応して、新しい信仰告白文書を数多く生み出している時代でもあります。信仰告白におけるこの新しい展開の分水嶺は、前述の『バルメン神学宣言』です。この『宣言』は、キリスト教信仰を「永遠の相のもとに」、すなわち時代や場所に関係なく、信仰の永遠の真理を包括的に叙述したという類のものではなく、むしろある特定の歴史的、文化的、社会的文脈という「今、ここで」の教会がその信仰において語るべきことを語ったものでした。この『バルメン神学宣言』以来、教会は新しい時代のさまざまな局面-政治的、経済的、社会的、生態学的な諸問題-に直面するたびに、世に対する宣教や弁証として、信仰の告白を為すようになりました。

ところで、信仰告白文書は、教会の「今、ここで」の生きた告白となるために、常に聖書によって吟味しなおされ、新しい状況の中で必要なら繰り返し改訂され、また新しく告白し直されていくべきものであるとの理解は、まさにわたしたちの教会が信仰告白を制定した時点での共通認識でした。「このような告白教会としての日本基督教会は、・・・伝統的信条の上に立ちつつも、常に現在、此の場所に於ける告白を持つのです。それが、日本基督一致教会から、旧日本基督教会へと飛躍した根本精神であり、さらに、新しい日本基督教会の形成にあたって、旧日本基

督教会の告白を改正して、新しい告白を制定した根本的態度でありました」(『教会員の生活』)とあるとおりです。

第60回大会を迎えるわたしたちの教会も、「今、ここで」宣教する教会として、現信仰告白では捕えきることのできない現代の新しい宣教状況に直面しているのではないのでしょうか。それらは、たとえば生態学的な問題であり、貧困や格差といった経済の領域における正義の問題であり、また諸宗教の対話と共存を通じての平和、等々といった諸問題です。わたしたちの教会は、地球規模のそれらの諸問題に直面して、語るべき新しい信仰の言葉を吟味し、次の時代に向かっての宣教の道しるべともなる告白を新たになすべきときに来ているように思われます。

## II. 主イエス・キリストの人格と救いのみ業

### 2 イエス・キリストの人格

「我らが主と崇むる神の独子イエス・キリストは、  
真の神にして真の人」

「わたしたちが主とあがめる神の独り子イエス・キリストは、  
真の神であり真の人です。」

Q 7 「我ら＝わたしたち」とはだれですか。

A 告白の主体であるわたしやあなた、つまり神に呼び集められた教会のことです。わたしたちは、教会の信仰に導かれ、その信仰の告白に同意しながら、他の信仰者とひとつ声をあわせて、自らの信仰を告白するのです。

申命記 31 : 19/詩編 75 : 1、89 : 1/I コリント 15 : 1~11/エペソ(エフェソ) 4 : 12~13

Q 8 イエス・キリストとはだれですか。

A イエスとは、「神は救う」という名前をもつ二千年前にユダヤ人として地上を歩まれた方です。キリストとは、旧約聖書で証しされているメシア＝「油注がれた者」、つまり「救い主」のことで、す。従って、イエス・キリストとは、「イエスはキリスト＝救い主である」、というキリスト教会のもっとも簡潔で、最古の信仰の告白でもあります。

イザヤ 9：6～7、11：1～9、61：1/マタイ 1：21、16：15、16/ルカ 2：11/ヨハネ 1：41、4：25～26、4：42/使徒 13：23/I コリント 8：6/II ペテロ（ペトロ） 3：2/cf. II ペテロ 3：18

Q 9 イエス・キリストを「主と崇める」とはどういうことですか。

A 「主」とは、わたしが生きる時も死ぬ時も心から信頼し、喜んで服従をささげる方であり、今も生きて全世界を治めるまことの王、支配者のことです。「崇める」とは、崇拜という礼拝行為を指しますが、本来の意味は「聖別する」＝「特別扱いをする」ことです。わたしたちは、ちょうど安息日を他の日とは違う特別の日とするように、イエス・キリストを他の何者とも混同せず、同列に置かず、まことの生ける神として礼拝するのです。こうして、本来神でないものを神とする偶像崇拜に満ちた世にあつて、わたしたちはイエス・キリストを主と崇めて服従するのです。

マタイ 14：33、27：54、28：9/ヨハネ 1：1、20：28/使徒：2：36/ローマ 1：3、14：8～9/I コリント 8：6、10：14、12：3/ピリピ（フィリピ） 2：6～8、10～11/コロサイ 1：15～17/ヘブル（ヘブライ）1：2～3、4：15

Q10 「神の独子」とは、どういう意味ですか。

A イエス・キリストだけが、神から永遠に生まれた唯一の御子であり、神と全く等しい方であるということです。ですから、この方以外にはだれも神を正しく認識することも、啓示することもできず、このお方を抜きにしては救いもありません。

ヨハネ 1：1、1：18、3：16、/ローマ 1：3～4/コロサイ 1：15～17/ヘブル（ヘブライ）1：3/I ヨハネ 4：9

Q11 「まことの神であり、まことの人」とは、どういうことですか。

A イエス・キリストにおいて、神は神であることをやめることなく、人間となつてくださったということです。ですから、イエス・キ



リストは、神と人間の間立つ資格をもつ唯一の仲保者となり、和解の務めを果たすことができるのです。

ヨハネ 1: 1, 18, 20: 28/ローマ 1: 3~4/ガラテヤ 4: 4/ピリピ(フィリピ) 2:6~9/コロサイ 1: 15~17/I テモテ 2:5, 3: 16/II テモテ 1:9~10/ヘブル(ヘブライ) 1: 2~3, 2: 14, 8: 6/I ヨハネ 4: 2/cf. ローマ 9: 5, ヘブル(ヘブライ) 1: 2~3, 9: 15, 12: 24, I テモテ 3: 16, I ヨハネ 1: 7

Q12 なぜ、神と人間の和解のために、イエス・キリストという仲保者が必要なのですか。

A 人間は、自らの罪によって破壊した神との交わりの回復に必要な、「義と聖と贖い」を自分の力で果たすことはできないからです。まことの神であり、罪のないまことの人であるイエス・キリストだけが、人間が償うべき罪の重荷をわたしたちに代わって負ってくださり、同時に、その罪と死に打ち勝って、神と人間の和解を成し遂げてくださるのです。この仲保者キリストによらなければ、だれも聖なる神の御前に立つことも、神との命の交わりに入ることもできません。

ヨハネ 3:16/ I コリント 1:30/II コリント 5:18~21/エペソ(エフェソ) 1:8~10/I テモテ 2:6/ヘブル(ヘブライ) 4: 15

## コメント2

### 「まことに神、まことに人」

「あなたこそ、生ける神の子、キリストです」(マタイ 16: 16)という告白の上にキリスト教会とその信仰は建てられますが、一体人間でありつつ神であるイエスを、どのように理解すればよいのでしょうか。イエスは部分的に人間、部分的に神であったということなのか、それともイエスは人間の中でも特別に偉大で、神的な神々しい人間であったという隠喩なのか、それとも神が人間イエスの体を一時借りて顕現したということなのか。

これらイエスの人性と神性の関係を巡る議論を、いわゆる「キリスト論」といいます。初期のキリスト教会にはユダヤ人が多かったせいか、

ユダヤ教的な唯一神理解からイエスの神性を否定する人たちが出てきたようです(エピオン主義)。他方、ヘレニズムの世界に育ったキリスト者たちには神の超越性と不受苦性というギリシャ的観念が強かったせいも、神御自身が人間となり(受肉)、苦難を受け、ついには十字架上で死ぬ神などということは、神の完全性に反するとして、地上のイエスを幻影であったと考える人たちがでてきました(キリスト仮現論)。そのようなギリシャ的の神観念をさらに極端に推し進めて、キリスト教を極めて観念的、思弁的に解釈したのが、救いを信仰ではなく秘教的知識に基礎付けたグノーシス主義の異端となるでしょう。やがて3世紀にはいると、父、子、聖霊の三一の神をギリシャ的多神教的に解釈されることを恐れて、神の単一性(モナルキア)を強調するあまり、一方ではイエスは元来人間であったが受洗の際に神の力(デュナミス)を受けて神の養子とされたという人たち(養子論的単一神論)がイエスの神性を犠牲にしてしまう。他方、イエスの神性と神の唯一性を同時に主張しようとして、イエスは父の存在の様態(モードス)にすぎないとし、結果的にイエスの人性を犠牲にしてしまう人たち(様態論的単一神論)が出てきます。そういう中で、イエスを父なる神と同本質である「神の独り子」(ニカイア信条)であり、「まことに神、まことに人」(カルケドン信条)と告白するに至って、キリスト教会の正統的信仰が確立されることとなります。

さて、わたしたちの教会は、何よりもニカイアやカルケドンにおいて確立された正統的教会のキリスト論の歴史を受け継ぎながら、その信仰の告白をキリスト告白から始めます。それは、「ニカヤ信仰が確保した、このキリスト論の一線が、今日の日本において、なお常に新しい課題であり、この告白の意義は大きい」(『教会員の生活』)という理解からです。しかも、このキリスト告白の強調には、戦後に日本基督教団から離脱して新しく教会形成を目指した日本キリスト教会の歴史的反省が込められています。それは、わたしたちはこの日本の地においてキリスト以外の何かを神として「崇め」たり、服従をささげたりしてこなかっただろうか、その意味でキリスト告白において欠けや弱さがなかったかどうかを、懺悔とともに深く自覚して、新しい出発をなしたということです。それはまた、今日に至る日本における汎神論的な神々や「主」を自称する世の支配者に対する宣教の戦いへの自覚でもあります。その意味で、キリスト論的告白は「今日の日本において、なお常に新しい課題」をもっているとわたしたちは信じています。

しかし、同時に、このキリスト論的告白は世々の教会が告白してきた伝統的な三一論的告白に比べると、神学的にやや偏りを感じないわけで

はありません。とりわけ、キリスト告白に比べて、たとえば聖霊告白のそっけなさなどを思うと、聖霊論が豊かに展開されはじめている今日においてはいかにも不十分な感じがします。そこに、わたしたちの新しい告白形成の課題もあることでしょう。

### 3 イエス・キリストの救いの業—十字架

「永遠なる神の経綸に従ひ、人となりて人類の罪のため十字架にかかり  
全き犠牲をささげて贖（あがな）いを成就し、」

「主は、神の永遠の計画にしたがい、人となって、人類の罪のため十字架にかかり、  
完全な犠牲をささげて、贖いをなしとげ、」

Q13 「永遠なる神の経綸＝神の永遠の計画」とは何ですか。

A 神が、イエス・キリストの受肉、十字架、復活に至る生涯のすべてのみ業において、永遠の昔から決定した人類救済計画です。神はこの計画のために、ご自分の創造した世界と人類を治め、導き、一切をこの恵みの計画のもとに置いています。

創世記 22 : 14/ヨブ 38 : 2/イザヤ 46 : 10/エレミヤ 29 : 11/マタイ 10 : 29  
～31/使徒 2 : 23/ガラテヤ 1 : 4/エペソ(エフェソ) 1 : 3～5、8～11/Ⅱテ  
モテ 1 : 9～10/へブル(へブライ) 6 : 17

Q14 一切が神の定めた計画なら、人間の自由、あるいは、罪の責任もないのではありませんか。

A 神は、わたしたちを自由の中で神と世界と人間を愛する責任ある存在として創造されました。しかし、わたしたちは、神の恵みの自由を誤用乱用し、自ら進んで神に背いたのですから、その罪の責任が大いにあります。

創世記 2 : 15、2 : 16～17、3 : 17/イザヤ書 59 : 1、2/ローマ 1 : 21～25

Q15 イエス・キリストはなぜ人間となったのですか。

A 神に創造された本来の人間性を見失い、神に背きつづけるわたしたちを、その罪と死の悲惨さから救いだし、神との交わりを回復させる、神と人間との間に立つ仲保者となるためです。

イザヤ 7:14、44:22/ローマ 8:3/ガラテヤ 4:4、5/ピリピ(フィリピ)2:6~11/ヘブル(ヘブライ)2:17/cf. マタイ 1:23/ローマ 5:18~19、ヘブル(ヘブライ)4:15

Q16 イエス・キリストは、なぜ十字架にかかったのですか。

A 罪のない神の独り子イエス・キリストだけが、わたしたち罪人の代理として、わたしたちが本来受けるべき十字架の死、つまり神の呪いと裁きをその身に引き受けて、わたしたちを罪から救うことができるからです。

イザヤ 53:5、11~12/マタイ 20:28/ヨハネ 1:29/使徒 2:23/ローマ 4:25、5:18/II コリント 5:20~21/ガラテヤ 3:13/エペソ(エフェソ)1:7/コロサイ 1:19~20/I テモテ 2:5~6/ヘブル(ヘブライ)2:9、14/I ペテロ(ペトロ)2:24/I ヨハネ 2:2

Q17 イエス・キリストが「全き犠牲=完全な犠牲」をささげたとは、どういうことですか。

A イエス・キリストは、わたしたちの罪のために、「贖罪のささげもの」である犠牲の小羊として、自由な意思をもって、自らをささげたということです。イエス・キリストの十字架における贖罪の犠牲をほかにして、動物であれ人間であれ、他の何ものの犠牲によっても罪人の罪が贖われることはありません。

創世記 22:2/I サムエル 7:9/詩編 49:7~9/ヨハネ 1:29/使徒 4:11~12/コロサイ 1:13~14/ヘブル(ヘブライ)9:11~12、10:12~14/ペテロ(ペトロ)1:18~19/I ヨハネ 2:2~3、4:10

Q18 それにしても、神はなぜ人間の罪を見逃してはくれずに、キリストによる贖罪の道を探られたのでしょうか。

A 罪を大目に見て水に流すことによっては、罪人は神との正しい関係を回復することはできず、神の前での責任のある歩みもできません。イエス・キリストの十字架に現れた罪に対する神の真剣な裁きと、罪人に対する真実な愛だけが、わたしたちに本当の悔い改めを起こし、神に喜ばれる信仰と命の道を開いていくからです。

## コメント3

### 「なぜ神は人となられたのか—贖罪説いろいろ—」

聖書には、キリストがわたしたちを贖う＝買い戻す(マルコ 10：45)のために死なれたと記されていますが、贖罪の理解に関してはさまざまです。例えば、古代教会では神がキリストにおいて罪と死と悪魔に勝利するために、キリストを賠償金として悪魔に支払ったという「賠償説」が主に主張されました。しかし、神が悪魔と取引してキリストの死を容認したり、復活によって結果的には悪魔をあざむくという「賠償説」は、神にとってあまり名誉ではないと考えられるようになりました。

そこで、アンセルムス(1033～1109)は、その有名な著作『なぜ神は人となられたのか』において、罪によって神の名誉を傷つけた人類のためにキリストが犠牲となることで、神は本来の名誉を回復し満足なされたという「満足説」を唱えました。それは、当時の封建制下の君主と臣下の騎士道の関係を基にしたものでしたが、後年顕著となるローマ・カトリック教会の「功德説」を補強誘発する傾向がありました。

やがて、宗教改革の時代には、新しい時代の政治的法律的概念に基づき、法の不可侵性と神の正義を強調することとなる処罰としての贖罪＝「刑罰代償説」が主張されるようになります。人間は罪を犯したので神の正義の法が破られ、刑罰は必至であった。しかし、キリストの代理的死により人間は赦され、同時に、神の正義も貫かれた、と。しかし、人間への刑罰の身代わりにキリストの死を要求するという冷たい神のイメージへの反撥や疑問も、当然起こってきます。

こうして、刑罰や代償といった恐ろしい、冷たい神観念を払拭し、ひたすら愛と恵みの神観念を強調するアベラルドゥス(1079-1142)の「道徳感化説」などが、近代の自由主義などともマッチして、現代でも流行しています。ただし、この説も和解を神の業と同程度に人間の悔い改めと改善した生活に依存させるあまり、結局は救いが人間の行為や状態いかんによって決まるかのようなことになってしまい、注意が必要でしょう。

さて、上述のどの説にも真理契機があるとともに、やはりどの説にも時代精神からくるのでしょうか、ある限界が見え隠れします。わたしたちは、わたしたちの罪のためイエス・キリストが十字架にかかり、代理的な犠牲となってくださったというキリストの救いのみ業について、改めて聖書にしっかりと聞きながら、「いま、ここで」どのようにそのみ業を伝えていったらよいのか、教理の歴史や教会の宣教の諸経験などを鑑みて、新たに探求していくべきでしょう。

それとともに、わたしたち『信仰の告白』が、イエス・キリストの救いのみ業を贖罪論に集中して語っていく語り方が適切かどうか、改めて考えてみる必要がありそうです。改革教会の伝統的なキリストのみ業についての告白の仕方、つまりキリストの三職(預言者、祭司、王)をバランスよく告白していく伝統からいうなら、わたしたちの『信仰の告白』は、キリストの祭司職一点に集中しているということになるでしょう。その分、キリストの「預言者職」と「王職」についての言及がまったくなされていません。伝統的告白の持つバランスを欠くとき、ちょうど近代贖罪論理解が結果的にキリストの救いのみ業を精神化、内面化していき、キリストの救いのみ業を二元論化して、この世の問題から撤退していく傾向があったことを思うと、わたしたちのキリスト理解が改めて問われるところです。

## 4 イエス・キリストの救いの業—復活

「復活して永遠の生命の保証をあたへ、  
救ひの完うせらるる日まで我らのために執成し給ふ。」

「復活して永遠のいのちの保障を与え、  
救いの完成される日までわたしたちのためにとり成してください。」

Q19 「復活」とは何ですか。

A 「無から有を造る神」の恵みの力により、十字架にかかり、葬られたイエス・キリストが、三日目に死者の中からよみがえらされた出来事です。

詩編 16 : 10、33 : 6/エゼキエル 37 : 4~6/使徒 3 : 15/ローマ 4 : 17~18/  
I コリント 15 : 12/cf. マタイ 26、マルコ 16、ルカ 24、ヨハネ 20

Q20 神は、なぜイエス・キリストを復活させたのですか。

A 神は、イエス・キリストの復活をとおして、その十字架の死を無駄や失敗に終わらせず、罪人のためのキリストの贖罪のみ業を確証してくださいました。こうして、わたしたちも今や罪と死の支配から解放され、キリストとともに神の国の新しい命の希望に歩めるようになりました。

ルカ 23 : 43/使徒 5 : 30、17 : 31/ヨハネ 3 : 16、6 : 40、11 : 25/ローマ 4 : 24~25、6 : 4、23、11 : 25/I コリント 6 : 14、15 : 20~21/II コリント 4 : 8~10、14/エペソ(エフェソ) 2 : 3~6/コロサイ 2 : 12、3 : 3/I ペテロ (ペトロ) 1 : 3~4

Q21 「永遠の命の保証を与え」とは何ですか。

A イエス・キリストが復活の初穂となってくださることで、キリストにあるわたしたちもまた死から永遠の命へ、すなわち光栄ある朽ちない体に復活させられることへの確かな保障となってくださったということです。

ヨハネ 6 : 40、11 : 25、14 : 19、17 : 2/I コリント 6 : 14、15 : 20~22

Q22 イエス・キリストは、復活の後、どうなりましたか。

A 四十日の間、弟子たちに神の国のことを語った後、天に上げられ、神の右に座し、救いの完成する日まで、神とともに万物を支配しておられます。

マタイ 28 : 18~20/マルコ 16 : 19/使徒 1 : 3~9、7 : 55~56/I ペテロ (ペトロ) 3 : 22

Q23 「救いの完成の日」は、いつのことですか。

A イエス・キリストが再び天からお降りになる再臨の時であり、万物の終わりの日です。その日、すべて生きている者と死んでいる

者とは共に裁きの座に立ち、信仰によって歩んだすべての者の救いが完成するのです。ただ、その日、その時については、父なる神のみが知っています。

マタイ 24 : 36/使徒 1 : 6~7/ I テサロニケ 5 : 1, 5 : 23/ II テサロニケ 1 : 8/ヤコブ 5 : 8/II ペテロ (ペトロ) 3 : 8~9/黙示録 20 : 13, 21 : 1~4, 22 : 12

Q24 「執り成し」とは何ですか。

A 「執り成し」とは、天に昇り、神の右に座すイエス・キリストがわたしたちのためのまことの大神司、弁護人として、神と人間の間に立ちながら、仲保者としての働きをしてくださることです。

イザヤ 53 : 12/ルカ 22 : 32, 23 : 34/ローマ 8 : 34~39/ヘブル(ヘブライ)4 : 14~16, 5 : 8~10, 7 : 25/ I ペテロ (ペトロ) 5 : 10/ I ヨハネ 2 : 1

## コメント4

### 「靈魂不滅と身体(からだ)の復活」

死んだ後、わたしたちはどうなるのでしょうか。すべての物質同様、わたしたちの身体も朽ち果て、無に帰すのでしょうか。それとも、多くの人々が訳もなく想像しているように、身体は朽ち果てても、永遠に残る靈魂のような何かがあって、地上を彷徨(さまよ)う。そして、春、夏、秋、冬、そしてまた春がやってくるという季節の移り変わりのように、自然界の循環法則に従って、やがて還るべきところに帰っていく(そして、永遠に輪廻転生を繰り返す)というのでしょうか。

古来、宗教は死と再生をめぐる生まれかたといわれていますが、不死の靈魂への憧れは古代の哲学者たちのものでもありました。昔のヘレニズムの形而上学やグノーシスの宗教哲学は、人間存在を永遠で不滅な「靈魂」と一時的で脆い「肉体」の合体と観て、人間本来の自由で永遠的な靈魂が不自由で時間的な肉体の牢獄に閉じ込められていることを嘆きました。彼らにとって、地上の歩みは仮の生であり、肉体は輕蔑の対象でした。ですから、上級な人間(?)は衣食住や肉体の欲望などに煩わされることなく、ひたすら天上を仰いで生きるべきでした。やがて、



死がやってくるでしょう。霊魂が肉体の牢獄から解放され、本来的に帰属している霊の王国に帰還するその死の瞬間こそ、新しい旅立ち、真実な命の始まりでした。

さて、そのような世界観が覆っていたヘレニズムの世界に、キリスト教は「からだの復活」の信仰をもって突入していきました。それは、当時の哲学や宗教思想界に一大革命をもたらすような考えでした。なぜなら、霊魂だけではなく「からだ」を重視するこの信仰は、人間を全体的・総合的に見る革新的な人間論を生み出したからです。

その影響を簡単に記すと、

- 1) 霊魂とからだ、地上の身体的、物質的生活と天上の霊的生活、などといった二元論に反対し、人間を霊魂と体、永遠と時間の全体的・総合的存在として見る人間論を生んでいった。
- 2) 霊魂は永遠的な神的存在ではなく、どこまでも被造物である。
- 3) 従って、「最後の敵」(1 コリ 15 : 26)である死の現実を重く受け止めねばならない。
- 4) キリストの死に関しても、その悲惨さを軽んじたり、仮現的に理解しない。
- 5) 人間の希望は、霊魂の解放としての死ではなく、無から有を創造する神の復活の力にある。

霊魂不滅ではなく、身体の復活こそわたしたちの命の希望なのです。わたしたちの国のような汎神論的で二元論的な宗教的、思想的土壌の中で、「からだの復活」の指針は、今日もなお力を持って伝えられていかねばならないと思います。

### Ⅲ. 信仰

#### 5 神の子の選びと信仰義認

「おほよそ神の選びを受け、この救ひの御業を信ずる者は、キリストに在りて義と認められ、功なくして罪の赦しを得、神の子とせらる。」

「神に選ばれてこの救ひの御業を信じる人はみな、キリストにあつて義と認められ、功績なしに罪を赦され、神の子とされます。」

Q25 「神の選び」とは何ですか。

A 神が、世の創られる前から、イエス・キリストにあつて救ひの民を選んでくださったという、神の先行的な恵みの働きのことです。

申命記：6～7/ヨハネ 15：16、17：6/ローマ 8：28～30/ガラテヤ 1：15/  
エペソ(エフェソ)1：3～5、11/Ⅱテサロニケ 2：13～14/Ⅱテモテ 1：9

Q26 イエス・キリストにおける神の先行的な恵みの働き以外に、救われる道はないのですか。

A ありません。わたしたちは、自分の力や功績で神の救ひの資格や条件を作り出すことはできません。ただひとえにイエス・キリストにおける神の先行的な恵みの選びによる救ひの御業を受け入れて、救われるのです。

ルカ 18：26～27/ローマ 10：3～4/I コリント 1：26～28/ガラテヤ 3：26/  
テトス 3：5～6

Q27 神の選びにもれている人もいるのでしょうか。

A だれが選ばれ、だれが選ばれていないかは、わたしたちには知りえません。わたしたちは、人々の選びと棄却に不安や興味を覚えるよりも、すべての人々を神の救ひに招かれるイエス・キリストに信頼し、このキリストにますます固く結びついて救ひの確信を得るのです。

マタイ 11：28、18：14/ルカ 13：23～24/ヨハネ 21：21/I テモテ 2：4

Q28 「義と認められる」＝「義認」とは何ですか。

A イエス・キリストの十字架の贖罪のみ業を信じる信仰によって義とされる「信仰義認」のことです。わたしたちは、この信仰によって、イエス・キリストにおける「神の義」をまとい、罪人であるにもかかわらず、同時に、神のみ前で義人とみなされるのです。

ハバクク 2：4/ローマ 3：21～26、4：5、25/ I コリント 1：30、6：11/  
II コリント 5：21/ガラテヤ 2：16、3：26、4：4～5/エペソ(エフェソ)1：  
4～5、2：8/ピリピ(フィリピ)3：9、エペソ(エフェソ)4：23  
1：4～

Q29 「功なくして」とあるように、救われるための資格や条件が不要なら、神の子らにはもはや律法や善き業も必要ないのですか。

A 律法や善き業は、決して神の子となる救いの条件や資格とはなりません。しかし、神の恵みによる十字架のキリストの尊い犠牲によって救われた人間は、大きな感謝と喜びの中から、神の恵みに応え、キリストに服従して生きる者とされます。そのとき、神の律法が神の子らの道しるべとなり、神の栄光を現わす善き業が、神の子らの生活の目印となるでしょう。

詩編 119：105/ヨハネ 1：12/ローマ 3：24/ガラテヤ 3：26、4：4～5、5：  
6/エペソ(エフェソ)1：4～5、2：8～10、4：22～24/コロサイ 1：9～10、3：  
9～17/ I テサロニケ 4：1/ I ペテロ (ペトロ) 2：11/ヤコブ 2：8、17/ I  
ヨハネ 3：1

## コメント5

### 「神の選びと人間の自由」

神はアベルの供物を喜び、カインのそれをお喜びにならなかったと創世記にはあります(創 4：4～5)。そういえば、聖書には「神はヤコブを愛し、エサウを憎んだ」とか、神は「ご自分が憐れむ者を憐れみ、憎むものを憎む」というような偏愛に似た言葉が散見します(ローマ 9：13、18、他にマタイ 22：14、ヨハネ 17：9、ローマ 9～11 章、など参照)。ここから、神の選びと棄却についての、複雑で難しい神学議論が戦われてきました。

ここでは、分かりやすい理念形として、古典的ともいえる三つの考え方を整理してみましょう。

#### 1) 「二重予定説」

神はある人を永遠に救いに、ある人を永遠に滅びに、と二重に予定しているという説です。その根拠は、聖書の章句に加え、何よりも神の「主

権」「自由」「聖定」の強調にあります(エペソ 1:3~11; ウェストミンスター信仰告白 2:1, 3:3 参照)。確かに、この教えには罪人の救いがただひとえに神の恵みの自由にあるという福音に適っています。しかし他方、ある人には神の義を強く迫り、ある人には神の愛を一方的に与えるという神観念には、神ご自身の中に分裂があり、まるで一貫性のない、恣意的な、暴君のような神と受け取られる危険性もあります。

## 2) 「普遍救済説」

「二重予定」とはまったく対照的に、神はすべての人を愛し、恵みを無条件に注いで、だれをも棄てないという考えです。聖書にも、そう読むことができる多くの箇所があります。例えば、ヨハネ 3:17、ローマ 5:18, 11:32, 1 コリント 15:22, コロサイ 1:19~20, 1 テモテ 2:4, 2 ペテロ(ペトロ) 3:9などを参照。しかも、この考えの優れたところは、救いを神の一方的な恵みに帰すことにおいて、「二重予定」論者よりもはるかに徹底しているところです。神の恵みは、人間の罪よりもはるかに大きい。すべての人を救おうとなさるキリストにある神のみ心は、人間の罪やサタンの反抗によっても、損なわれることはないはずだ、と。しかし、この教えは、神の怒りを真剣に受け止めず、罪やサタンの巧妙な企みを軽視することにもなりかねません。何より、「許されざる罪」(マルコ 3:29)とか、「羊と山羊の分離」(マタイ 25:32~33)に関するキリストの厳しい警告が無視されることとなり、聖書的かどうか問われます。

## 3) 「ペラギウス主義」

前二者が神の主権と自由を強調するとすれば、これは人間の自由の力を強調する考えと言えます。スコットランド出身のペラギウスという人によって唱導されたところからペラギウス主義と呼ばれるこの説は、人間は神の律法に従う自由が与えられているのだから、自らに自由を行使する責任があって、その自由を持って神に従えば恵みが、拒めば罰を受けるという、人間の良き業による自己救済を教えるものです。

さて、わたしたちの教会は「神の主権的自由と人間の自由」の問題をどのように理解しているのでしょうか。わたしたちの信仰告白は、この点において、どちらかの極端に偏ることなく、穏健でバランスのとれた改革教会の伝統に立っているように思われます。信仰告白のこの箇所は、いわば「教会の立ちもし、倒れもする条項」と言われる「信仰義認論」を展開している箇所ですが、しかしわたしたちの告白は人間の側の信仰

を強調したルター的な信仰義認に集中せず、その条項を神の主権的恵みを表す「選び」の信仰(前段からいうと、『永遠なる神の経綸』)の中で展開しています。しかも、その両者を「キリストに在りて」という風に、キリストにおいて調和をもって告白しています。神の主権とそれに基づく人間の応答的な信仰をキリストにあって見る穩健な理解こそ、聖書的な理解であるように思われます。

## 6 聖霊と聖化の生活

「また父と子とともに崇められ礼拝せらるる聖霊は、  
信ずる者を聖化し、御意（みこころ）を行はしむ。」

「また、父と子とともにあがめられ礼拝される聖霊は、  
信じる人を聖化し、御心を行わせてくださいます。」

Q30 「聖霊」とはだれですか。

A 聖霊は、父なる神、子なる神と同様、わたしたちが崇め、礼拝する神ご自身です。

創世記 1 : 2 / イザヤ 48 : 16 / マタイ 28 : 19 / 使徒 5 : 3 ~ 4 / II コリント 13 : 13

Q31 「聖霊」の働きは何ですか。

A 聖化する働きです。聖霊は、父なる神と子なる神から送られた「真理の霊」として、わたしたちの内に働いて「イエスはキリストである」という信仰を起こしますが、キリストを信じる者たちをさらに聖なる者とします。

詩編 51 : 10 ~ 11 / ヨハネ 3 : 5, 14 : 17, 26, 15 : 26, 16 : 7 ~ 8, 13 ~ 14 / 使徒 1 : 8, 2 : 1 ~ 4 / ローマ 5 : 5, 8 : 14, 26, 15 : 16, 26 / I コリント 2 : 10, 12, 3 : 16, 6 : 11, 12 : 3, 12 ~ 13 / ガラテヤ 5 : 16 / エペソ (エフェソ) 3 : 14 ~ 19, 4 : 1 ~ 3 / コロサイ 1 : 9 ~ 10 (新共同訳)、II テサロニケ 2 : 13 / テト

Q32 「聖化」とは何ですか。

A わたしたちは、神が聖であられるように、聖なる者となるように召されています。それは、聖霊の潔める働きによります。聖霊は、わたしたちをイエス・キリストに結び合わせ、キリストの義に与らせるとともに、聖化の働きによって、わたしたちの古い自己を死なせ、新しい自己を生まれさせながら、神の御心を行わせてくれます。

レビ 11 : 44~45/ヨハネ 3 : 5/ローマ 1 : 7, 6 : 4~14, 8:9~16/ I コリント 6 : 11/エペソ(エフェソ)4 : 22~32/ I テサロニケ 4 : 7/ I ペテロ(ペトロ)1 : 15~16

Q33 「神の御意(みこころ)を行わせる」とはどういうことですか。

A 聖化の目的であり、内容である神の御意を行わせるとは、わたしたちが主イエス・キリストを信じて洗礼を受け、まことの神を礼拝しながら、主の体である教会へと造りあげられ、福音宣教に従事し、奉仕(神礼拝と隣人奉仕=ディアコニア)に生きるという、神の子らの生活を、聖霊が遂行させてくれるということです。

ローマ 12 : 1~2 ; 5~18/ピリピ(フィリピ)1:6/エペソ(エフェソ)2 : 10

## コメント6

### 「聖霊の信仰」

古代教会に、モンタヌス(?~170頃)という人が現れ、聖霊によるカリスマ運動を通して教会を大混乱に陥れました。宗教改革の時代にも熱狂的な聖霊主義者が、生まれただけのプロテスタント教会を危機に陥れました。また現代では、20世紀初頭に反知性主義、反教会制度、分離主義的なペンテコステ運動の興隆によって、教会は困惑させられてきました。

このように、教会は昔から、聖霊を強調する人々やその運動に悩まされてきたところがあって、その結果、聖霊の教理については、「夤(あつ

ものに懲りて、膾(なます)を吹く」といった感があるのは事実でしょう。日本キリスト教会の信仰の告白も、聖霊については、聖化との働きにしか触れず、西方教会が強調してきた聖霊によるキリスト認識についてさえも触れていませんので、かなりそっけない印象は否めません。その他、現代の教会が 聖霊について無視したり沈黙するのはおかしなことです。

ところで、今日における聖霊論の展開は、キリスト教会の長い歴史における教会分裂と教派絶対主義を何とか克服するために生まれてきた、二十世紀のエキュメニカル運動とも深く関わっています。この運動の広がりによって、それまでの敵は、「聖霊の交わり」のもと、兄弟姉妹として受け止められるようになり、教派は「キリストの体」というより大きな一体性のための相互補完的な存在として理解されるようになりました。そのような全教会的一致をめざして、諸教会はこれまで教会分裂の原因となった問題をもう一度取り上げ、再吟味するようになっていきました。そういう中、聖霊の理解について大きな隔りがある東方教会と西方教会の聖霊理解が明らかとなり、新しい聖霊論理解へのきっかけとなってきました。

たとえば、1054年に東西の教会分裂を決定的にしたといわれる聖霊に関する見解の相違問題を取り上げてみましょう。西方教会は、ニカイア・コンスタンティノープル信条(325年の原ニカイア信条の381年改訂版)に聖霊が父からだけではなく、「子からもまた＝フィリオクエ」発出するという語句を挿入しました。それは、聖書にそのように記されていること(父と子の両者が聖霊の派遣者というヨハネ14章など参照)によりますが、原ニカイア信条の「父からの聖霊の発出」というだけでは、キリスト抜きに、そして神の言抜きに、聖霊によって父なる神と直接結びつくことができるかのような理解に道を開くからでしょう。しかし、この「フィリオクエ」という一語の挿入の結果、西方教会は神の言(ことば)とキリスト論中心の教会となり、聖霊の自由な働きについては上述のように否定的か、極めて用心深い態度しかでてこないことも事実です。それは、本当に聖書的なことなのかどうか問われています。

とりわけ、キリスト論的で、かつ、三位一体論的な神学が強調される現代、聖霊の神についての理解は、今後の教会のあり方を決定する大事な問題となることでしょう。父と子と聖霊である神を豊かに告白できるような信仰がわたしたちにも問われています。

## 7 三位一体の神の恵み

「この三位一体なる神の恩恵によるにあらざれば、  
罪に死にたる人、神の国に入ることを得ず。」

「この三位一体なる神の恵みによらなければ、  
人は罪のうちに死んでいて、神の国に入ることはできません。」

Q34 「三位一体なる神」とはどういうことですか。

A 一人の神が、三つの位格＝個性を持っておられるということです。すなわち、父なる神、子なる神であるイエス・キリスト、聖霊なる神が、それぞれの個性を失うことなく、しかも一人の神として存在するということです。

出 20 : 2~3/申命記 6 : 4/マルコ 12 : 29~30/マタイ 28 : 19-20/ヨハネ 1 : 1  
~4, ヨハネ 4 : 34, 5 : 19, 10 : 30, 14 : 9, 15~18, 15 : 26/ I コリント  
8 : 4/ II コリント 13 : 13/エペソ(エフェソ)4 : 6/ピリピ(フィリピ)2 : 6  
~11/コロサイ 2 : 9/ヘブライ 1 : 5

Q35 神は唯一の方ではないのですか。

A 神は唯一の神ですが、それは他者をまったく必要としない孤独の神ということではありません。むしろ、神は関係を生きる神です。その関係には、三位一体の神相互の内なる関係と、世界や人間に対する外に向かったの関係があります。

Q36 三位一体なる神の内なる関係はどうなっていますか。

A 父、子、聖霊の三位一体なる神は、「前後なく、優劣なく、みずから永遠に、等しい」(アタナシオス)方ですが、内においては、父なる神として他の何者にもよらず自(みずか)ら存在し、生まれることなく、発出することもしません。子なる神は永遠に父なる神から生まれ、聖霊なる神は永遠に父と子とから発出されます。

ヨハネ 1 : 14, 18, 15 : 26

Q37 三位一体なる神の外に向かったの関係はどうなりますか。

A 三位一体なる神は、罪人を救うその恵みの働きを分離することな



く遂行しますが、同時に、混同することもなく、父としては人間を創造する創造主として、子としては罪人をあがなう和解主として、聖霊としては罪人の聖化と救いを完成する方として、関係的に働いているということです。

Q38 罪とは何ですか

A 人間が、神から与えられた自由を乱用し、神の言に背くことで、自らの欲望と不従順に陥り、まことに悲惨な状態にあることです。

創世記 3 : 1~24/エレミヤ 3 : 25、17 : 9/アモス 3 : 2/ローマ 3 : 10~20、5 : 12~14、7 : 15~20/ I コリント 8 : 9、12/ガラテヤ 5 : 13/エペソ(エフェソ) 2 : 1~3、5 : 6/ピリピ(フィリピ) 3 : 19/ヤコブ 1 : 14~15/ I ペテロ(ペトロ) 2 : 16

Q39 「罪に死にたる人」とはどういうことですか。

A 人間が自ら犯し、選んだ罪の結果、神の呪いと裁きを免れず、神との命の交わりを失って、「神も希望もない」状態、生きていても死んでいるような人間のことです。

申命記 30 : 15~20/詩編 51 : 3~4/ルカ 15 : 1~32/ I コリント 3 : 16~17/エペソ(エフェソ) 2 : 1/コロサイ 3 : 5~7/ I ペテロ(ペトロ) 4 : 3/

Q40 「神の国」とは何ですか。

A 三位一体なる神がまことの神、まことの主として支配し統治する義と平和と喜びの国です。

マタイ 12 : 28~29/ルカ 17 : 20~21/ヨハネ 3 : 3、18 : 36/使徒 1 : 6~11/ローマ 8 : 21~25、14 : 17

Q41 神の国はどこにありますか。

A 神の国は、この世のどこかに見える形ではありません。しかも、この世の時間と空間を超えて、イエス・キリストにおいてわたしたちのところに近づき、信じる者の只中にすでに存在し、やがて主の再臨において決定的な形で実現する神の支配のことです。

マルコ 9 : 1/マタイ 12 : 28/ルカ 12 : 40、17 : 20~21/ I ペテロ(ペトロ) 4 : 7、12~13/ I ヨハネ 1 : 3

Q42 神の国に入るためには、どうすればよいのですか。

A 神の国に入るために、人は新しく生まれ変わらなくてはなりません。主イエス・キリストを信じ、自らの罪を悔い改め、洗礼を受けた者に、神の国の門は開かれるのです。

ヨハネ 3 : 5/使徒 4 : 12、20 : 32/ローマ 5 : 12、15、21、8 : 11/エペソ(エフェソ) 2 : 1、4~6/コロサイ 2 : 13、3 : 3/ピリピ(フィリピ) 2 : 9~11/テトス 3 : 5~7

## コメント7

### 「三一神論の探求、一神教と多神教を超えて」

一神教と多神教の違いを強調することで、日本古来の精神風土、すなわち多神教的、汎神論的社会的優位性を主張する言説がまかり通っています。そこには、いわゆる「9.11 後の世界」の政治的不安定やナショナリズムの復活等々、いろいろな要因が考えられるようですが、ともかく近代社会の成立を一神教(宗教や文明)に見て、今なお克服することのできない近代社会の諸問題(戦争や自然破壊など)を一神教(文明)の限界と見ると同時に、返す刀で、日本の多神教(文明)こそがそのような一神教的思考の限界を乗り越え、世界の諸問題解決に貢献する、という楽観的な自画自賛の言説となっています。

それはともかく、宗教学的には一神教に括られるキリスト教は、ユダヤ・イスラム教と並んで、必然的に他の諸宗教や文化との対立・衝突を避けることができないのでしょうか。あるいは、キリスト教信仰は唯一の神を信じるゆえに、排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は寛容・協調的・友好的・自然と共生的であるとは本当でしょうか。

かつてH. R. ニーバーは『近代文化の崩壊と唯一神信仰』の中で、「唯一神主義」、「単一神主義」、「多神主義」という三つの宗教社会学的パラダイムが社会に与える影響を考察しました。その際、彼は「単一神主義」は社会的信仰として、自らが属する集団やその精神を絶対化して「多数の中の一つ」に過ぎないものが他を排除する閉鎖社会を形成していくと

いいます。もしキリスト教を単純に「単一神主義」と捉えるならば、冒頭に述べた言説の中にもある正当性があることになります。

ところで、「単一神主義」における中心的な価値が分裂することで、自己と社会の多元主義の中に対応物を持つ「多神主義」が、特に社会的信仰が崩壊した時期に現れるとニーバー続けます。しかも、両者の問題を隣人愛という観点から次のように批判します。「多神主義的信仰では、隣人は、わたしの利益グループのなかの近い者と規定され、つかのまの結びつきでわたしに近づくものである。単一神主義という社会信仰では、私の隣人は、閉鎖社会のわたしの同僚ということになる」。

それに対して、キリスト教は第三の徹底的唯一神主義とされます。それは唯一の神が存在の全領域に愛をもって向かい合い、存在すべてを価値づけるといふ、徹底的な信仰であるといえます。

「敵をも愛する」ことを命じる聖書的な神についての彼の上述の説明が成功しているかどうかはわかりませんが、いわゆる排他的唯一論でもなく、かといって汎神論的融合でもなく、愛をもって他者性を豊かに包み込むキリスト教の三一神論を、わたしたちはいかにして理解し、展開していくのか、これは優れて今日の課題ではないでしょうか。

## IV. 聖書

### 8 神の言としての聖書

「新旧約聖書は神の言にして、そのうちに語り給ふ聖霊は、主イエス・キリストを顕示し、信仰と生活との誤りなき審判者なり。」

「旧・新約聖書は神の言であり、そのなかで語っておられる聖霊は、主イエス・キリストを顕かに示し、信仰と生活との誤りのない審判者です。」

Q43 「聖書」はどのような書物ですか。

A 聖書とは、神の靈感を受けた預言者や使徒たちによって書かれた、旧約の部 37 文書、新約の部 27 文書、合計 66 文書からなる書物です。

I ペテロ(ペトロ)1 : 11~12/II テモテ 3 : 16/ I ヨハネ 5 : 9

Q44 旧約と新約の関係を教えてください。

A 旧約はやがて来たりたもう神の独り子、わたしたちの救い主イエス・キリストを証し、新約はすでに来たりたもうイエス・キリストを証したものです。ですから、その関係は、影と本体、あるいは約束と成就の関係として、両者を分離することはできません。従って、旧約は新約の光に照らされ、新約は旧約を背景として、共にイエス・キリストを見出すようにして読む必要があります。

マタイ 5 : 17/ルカ 4 : 21, 24:25~27/ヨハネ 1 : 17, 5:39/使徒 3 : 18, 13 : 33/ローマ 4 : 14/コロサイ 2 : 17/ヘブル 1 : 1~2, 8 : 5, 10 : 1, 11 : 13

Q45 聖書が「神の言」といわれるのはなぜですか。

A 聖書は、聖霊の導きによって読む者にとって、神自身が語る言そのものだからです。また、何よりも聖書は生ける神の言であるイエス・キリストを証言している書物だからです。

マタイ 4 : 4/ヨハネ 1:1~5, 14, 5 : 39/ I テサロニケ 2 : 13/ヘブル(ヘブライ)4 : 12/II テモテ 3 : 16/ I ペテロ(ペトロ)1 : 23/ I ヨハネ 5 : 9

Q46 聖書の中で語る聖霊がキリストを明らかに示すとは、どういうことですか。

A イエス・キリストは、聖書を聖霊の導きによって読むときに、明らかに示されるという意味です。従って、イエス・キリストに対する信仰は、聖書の言葉を抜きにして聖霊によって直接に知られるのではなく、逆に聖霊なしでも聖書を直接に研究することで分かるというのでもありません。聖書のみ言葉と聖霊のお働きを切り離れたところでは、イエスをキリストであるとする信仰は出てこないのです。

ルカ 24 : 27, 44/ヨハネ 5 : 39, 14 : 26/使徒 8 : 35/ I コリント 2 : 4~5, 10~13, 12 : 3/II コリント 3 : 6/ I テサロニケ 1 : 5~7/II テモテ 3 : 16/

- Q47 聖書が「信仰と生活との誤りなき審判者」とはどういうことですか。
- A 教会の信仰と生活の一切のことは、聖書によって教えられ、導かれ、正されるということです。教会は、聖書以外の何者の權威の下に立ちませんし、支配されることはありません。

## コメント8

### 「神の言葉としての聖書」

「聖書」とは、英語のザ・ホーリー・バイブル(The Holy Bible)の翻訳です。それは、ギリシャ語の「書物」(タ・ビブリア)に聖(ホーリー)という形容詞をつけたものですが、ギリシャ語ではビブロスから派生したビブリオン(小冊子)の複数形に定冠詞「タ」が付いだけですから、正確には「あの小冊子類」という意味になるのでしょうか。

「正典」という言葉も英語ザ・キャノン(The canon)の訳語ですが、この英語ももともとはギリシャ語のカノーンやヘブル語のカーネから生まれました。カノーンという語は、新約聖書では「法則＝原理」(ガラテヤ 6 : 16)、「限度」(Ⅱコリント 10 : 13、15)と訳されています。旧約では、「葦」(列王上 14 : 15、列王下 18 : 21、ヨブ 40 : 21、詩編 68 : 30、イザヤ 19 : 6、35 : 7、36 : 6、42 : 3、エゼキエル 29 : 6)の意で、やがて「測りさお」(エゼキエル 40 : 3、5)や「はかり」(イザヤ 46 : 6)という、何かの基準や標準となるものを指すようになったものです。この用語が、キリスト教会でも、信仰と生活の基準となる聖書を表す用語として定着しました。

さて、聖書はいつころ教会の正典となったのでしょうか。ユダヤ教会が、聖書正典を決定したのは紀元 90 年のヤムニヤ会議でした。キリスト教会は、このユダヤ教正典(=旧約)を当初から自分たちの聖書としていましたが(ルカ 24 : 25~27, 44~47, ヨハネ 5 : 39, ローマ 1 : 2~4, 16 : 25, 26, Iコリント 15 : 3~5, Ⅱテモテ 3 : 15 など

参照)、両者の間には旧約文書の数と並べ方に違いがあります。ユダヤ教聖書は、(1)「トーラー＝律法」、(2)「ネビーイーム＝預言者」、(3)「ケスービーム＝諸書」の三部に分かれ、全部で39文書あります。それに比べ、キリスト教の旧約聖書では、並べ方が文学類型別に編纂されて、最初の5文書(「モーセの五書」)はユダヤ教でいう「トーラー」に対応していますが、以下、歴史書、詩編文学と知恵文学、預言書の順で並べてあります。大きな問題は、キリスト教会の中で、旧約諸文書の文書数が違うことです。プロテスタントの多くは、ユダヤ教聖書同様39文書を旧約の範囲としています。聖公会ではその他に13文書を、カトリックでは7文書を、それに加えます。この違いから教理的な不一致も生じていますので、教会一致にむけての大きな課題となるでしょう。

新約に関しては、アレクサンドリアの司教アタナシウスの「第39復活祭書簡」(367年)に新約正典の範囲の曖昧さに終止符を打つため27文書と明記されたことや、397年の第3回カルタゴ会議において同様の決定がなされたことから、新約文書数に関しては全キリスト教会は一致しています。

ところで、正典論もそうですが、聖書に関して諸教会の間で理解が一致しないのは、聖書の神言性と人言性の関係でしょう。これについては、今日まで主に四つ見解が述べられてきました。1)「聖書は神の言葉である」、2)「聖書は神の言葉と人間の言葉の両者を含む」、3)「聖書は人間の言葉であるが、聖霊の働くときに、神の言葉となる」、4)「聖書は人間の言葉である」。わたしたちの教会は、「聖書は神の言葉である」と告白します。ただし、この告白は聖書の一点一画まで神の靈感を受けて無誤無謬だとするいわゆるファンダメンタリストたちの「逐語靈感説」と同じなのではないでしょうか。そうは思えません。では、どのように違うのでしょうか。その辺りの理解の仕方が、わたしたちの告白ではまったく触れられていません。ですから、もう少し丁寧な取り扱いが必要かもしれません。これは、憲法に「信仰告白と共に保有する」と言われた「信仰問答書」の務めかもしれませんが、聖書理解の大きな方向と線は今後の新しい信仰告白においても示されねばならないでしょう。

## V. 教会

### 9 キリストの体としての教会

「教会はキリストの体、神に召されたる世々の聖徒の交りにして、主の委託により、正しく御言を宣べ伝え、聖礼典を行ひ、信徒を訓練し、終りの日に備へつつ主の来り給ふを待ち望む。」

「教会はキリストのからだ、神に召された世々の聖徒の交わりであって、主の委託により正しく御言を宣べ伝え、聖礼典を行い、信徒を訓練し、終わりの日に備えつつ、主が来られるのを待ち望みます。」

Q48 教会とは何ですか。

A 教会とは、神の永遠の予定と選びにより、古今東西から召し集められた、「唯一の、聖なる、公同的な、使徒的」な「神の民」です。「キリストの体」とか「聖徒の交わり」とも呼ばれます。

使徒 1:6~11、2:38~47/ローマ 10:14、15/I コリント 1:2、3:10、12:12~13/エペソ(エフェソ) 1:22~23、2:19~22、3:14~19/I テサロニケ 2:13~14

Q49 教会はなぜ「キリストの体」と呼ばれるのですか。

A 教会は、神の御心のうちに世のはじめから存在し、旧約の時代には神の民イスラエルのうちに始められていたとはいえ、イエス・キリストの十字架と復活の後、聖霊降臨日(ペンテコステ)に、新しく恵みの契約の民として建てられたものです。そこでは、キリストが頭であり、教会はキリストの地上的な体として、主の御業に努めます。

ヨハネ 1:14、15:5/使徒 2:42/エペソ(エフェソ)1:4~5、23/ピリピ(フィリピ)1:29/コロサイ 1:18/I ヨハネ 1:3

Q50 教会はなぜ「聖徒の交わり」と言われるのですか。

A 聖徒とは、キリストの十字架の贖罪によって罪赦され、聖霊によって聖別された信仰者のことで、洗礼と聖餐に共に与りながら、一つの信仰、一つの愛、一つの希望を共に告白しながら、神の国

に向かって進む交わり＝共同体であるからです。

マタイ 8 : 11、10 : 16、/ヨハネ 17 : 14～17/ローマ 1 : 7/ I コリント 1 : 2、12 : 12～13/エペソ(エフェソ) 1 : 18、2 : 20～22/ピリピ(フィリピ) 1 : 27～28、2 : 1～5/ I テサロニケ 4 : 9～10/ヘブル 10 : 10/ I ヨハネ 2 : 10

Q51 そもそも、教会はなぜ必要なのですか。

A 信仰は、神と人間の個人的交わりに留まらず、神の契約の民の召集、建設、派遣にかかわるからです。その意味で、教会の外に救いはなく、わたしたちは教会へと接ぎ木されて、神の子らの命を回復するのです。

Q52 真実の教会を見分ける目印はありますか。

A 三つあります。み言の宣教と聖礼典の正しい執行と教会訓練です。

Q53 教会の第一のしるしを説明してください。

A 教会は、神の言の宣教によって存在します。神の言の宣教とは、主の委託によって聖書に証しされたイエス・キリストを宣べ伝える説教を中心とする教会の宣教のことです。

マタイ 28 : 19～20/マルコ 16 : 15～16/ I コリント 11 : 23～25/ II コリント 5 : 19/ I テサロニケ 2 : 4/ II テモテ 4 : 2/ テトス 1 : 3

Q54 教会の第二のしるしである聖礼典とは何ですか。

A 主イエス・キリストが、説教と共に終わりの日に至るまで守り行うべきものとして制定して下さった洗礼と聖晩餐のことです。神の言にしたがって、聖礼典が正しく執行されているところ、教会があります。

マタイ 28 : 19～20/マルコ 16 : 15～16/ I コリント 11 : 23～25、27～29

Q55 教会の第三のしるしである「訓練」とは何ですか。

A 教会が主イエス・キリストに委ねられた権能をもって行使する、戒規を伴った指導のことです。教会はこの訓練をとおして、キリストの体の清潔を保ち、その体を固く建て上げ、終わりの日を待ち望んで歩みます。なお、「信徒を訓練し」とは教職・長老・執事・一般信徒のすべてを含む、全教会的訓練をさします。



マタイ 18 : 15~20/Ⅱテサロニケ 2 : 15/Ⅱテモテ 4 : 2/テトス 2 : 1~10/ヤコブ 1 : 22

Q56 「終わりの日に備える」とはどのようなことですか。

A 世と世の有様は過ぎ去ることを思い、福音宣教のみ業に従事しつつ、来るべき神の国の到来に備えて生きることです。

マタイ 24:14、44/使徒 1 : 11/ピリピ(フィリピ)3 : 20/Ⅰテサロニケ 5 : 23 /Ⅱペテロ(ペトロ)3 : 8~9、11~12/黙示録 22 : 20

Q57 「主の来たりたもうを待ち望む」

A この世からの逃避でもなく、しかしこの世への埋没でもなく、世にあって永遠のみ国を目指して進む終末に生きる主の民としての責任ある歩みのことです。

Ⅰコリント 15 : 24、12 : 7~10/ピリピ(フィリピ)3 : 13~14/Ⅰテサロニケ 5 : 8/ヤコブ 4 : 15、5 : 7~8/Ⅰペトロ 4 : 7/Ⅱペテロ(ペトロ)3 : 11~12

## コメント9

### 「真実な教会の形成を目指して」

わたしたちの教会は、「信仰告白」を重んじない、あるいは、信仰告白の一致をもたない日本基督教団から離脱した教会です。そのような教会として、わたしたちの1953年の信仰告白は、はじめから「真実の教会の形成」という課題を自覚していました。それは、現信仰告白がそれを継承したという1890年の「日本基督教会信仰の告白」には存在しなかった、「教会はキリストの体、云々」という教会についての項目を新しく付け加えたところからも明らかです。その意味で、日本キリスト教会はその出発時点から、旧日本基督教会では希薄であったと言われる教会的自覚を明確にもって出発した群れであったということは、忘れてはならないことです。ただ問題は、その点におけるわたしたちの教会理解、教会的自覚とは何かということになります。ここでは、現信仰告白から、わたしたちの大事にしている教会的自覚とはどのようなものか、を確認することにいたしましょう。

ところで、わたしたちの信仰告白は、教会について、聖書から「キリ

ストの体」、古代教会の信条から「聖徒の交わり」という伝統的用語を用いて告白ます。

「キリストの体」との告白は、明らかに教会が単にキリストに傾倒する者たちの任意団体というようなことではなく、今も生きて働いたもうキリストとの霊的、生命的交わりに結び付けられた、キリストを頭とする群れであるということで、教会の頭なるキリストとその体であるわたしたちの主従関係が明らかにされています。そのことで、教会にとって大事なものはわたしたちの計画や運動ではなく、「主の委託」を行う団体ということになって行きます。

しかも、この「キリストの体」が「聖徒の交わり」と結び付けられ、教会がキリストの体としての神秘的、霊的集まりであると同時に、神の選び、キリストの贖罪のみ業によって召し集められた信仰者の集まりであることも強調されます。そこには、「聖徒の交わり」を「諸聖徒の通功」という sacramental な救済機関としての交わり＝共同体として解釈する、伝統的なローマ・カトリック教会の理解に対してのアンチテーゼがあります。しかも、同時に、近代プロテスタント教会の陥った、信仰が神との直接的な個人的関係に溶解していき、やがて教会なしのキリスト教になって行きかねない傾向に対してのアンチテーゼともなっています。

さて、このような基本的な規定から、真実な教会形成のための「主の委託」が展開されていきます。それは言い換えると、宗教改革者たちが取り上げた教会の標識（目印）という問題になります。宗教改革者たちは、教会の標識（目印）として、二つか三つをあげました。わたしたちの告白は、『アウグスブルク信仰告白』第7条に基づいて、「正しく御言葉を宣べ伝え、聖礼典を行ひ」とあるように二つの教会の標識（目印）を直接的には告白しているものと思われます。しかし、それらを「正しく」宣べ伝え、行うと言われる点を重く受け止め展開しているものとして、「信徒を訓練し」という一句を挿入したという風に考えるなら、これらは改革教会が真実の教会の第三の標識（目印）として付け加えることの多かった「教会訓練」というものを、わたしたちの教会も大事に考えているということになるでしょう（『スコットランド信仰告白』『ベルギー信仰告白』『エムデン信仰告白』参照）。

その意味で、わたしたちの教会は、古代教会の伝統的な教会理解とともに、宗教改革者たち、特に長老改革教会的な教会理解をもって、新しく出発したということになろうかと思えます。

## VI. 使徒的信仰

### 10 使徒的信仰の伝統と聖書

「いにしへの教会は聖書に拠りて左の告白文を作れり。  
我らもまた使徒的信仰の伝統に従ひ、  
讚美と感謝とを以てこれを共に告白す。」

「古代の教会は、聖書にもとづいて次のように信仰を告白しました。  
わたしたちもまた、使徒的信仰の伝統にしたがい、  
讚美と感謝とをもってこれを共に告白します。」

Q58 「いにしへの教会＝古代の教会」とは何ですか。

A 主イエス・キリストの信仰が純粹に保たれていた、「唯一の、聖なる、共同の、使徒的」教会で、神の言葉に一致する「使徒信条」を生み出した聖書的な教会のことです。

Q59 「使徒的信仰」とは何ですか。

A 使徒たちによって伝えられ、聖書に証しされている信仰のことです。ここでは、古代教会が生み出した「使徒信条」によって明らかとされた信仰を指します。

使徒 17 : 11/ローマ 6 : 17～18、10 : 8～9/ I コリント 15 : 3～4

Q60 「伝統」とは何ですか。

A 使徒的信仰が歴史の中で継承される過程であり、それぞれの時代と場所と状況の中で教会を真実に建てていく基礎的土台となるものです。

Q61 「聖書のみ」と「伝統」の関係を説明してください。

A イエス・キリストを歴史において継承する過程においては、誤った伝統も入り込むことがあります。そのとき、その伝統の真偽を正すのが聖書です。従って、「聖書のみ」という宗教改革の標語は、聖書が教会の真実の伝統を吟味し、教会を常に新たにしてい

く上位の権威/規範であることを指します。

Q62 『使徒信条』はどのようなものですか。

A 『使徒信条』は、古代教会において洗礼者のための教理として作られたもので、三位一体なる神の信仰について信じ、告白すべきキリスト教信仰の簡潔な要約として、世界の諸教会共通の信条となったものです。

Q63 なぜ『使徒信条』を告白するのですか。

A わたしたちは、『使徒信条』を告白することによって、わたしたちの教会が使徒的信仰に立つ世々の共同の教会に連なる一肢(ひとえだ)であること、また世界の諸教会との信仰の一致を求めて歩む教会であることを表明しています。

## コメント 10

### 教派の歴史とエキュメニカル運動

唯一の神、唯一の救い主を信じるキリスト教会が、なぜこれほどたくさんの方々に分かれているのか、世の多くの人たちはいぶかしく思っています。実際、教派は独善的な精神による悪しき自己主張の産物のように思われていて、世の「つまずきの石」となっています。

もっとも、教派そのものの誕生は、真理の独善的主張というよりは、むしろ自己の持つ真理だけが唯一絶対的なものではなく、真理を分け持つ他者との共存協力によってのみ、一つの全体的真理が明らかにできるという、まことに謙虚な自己認識から出たものだといえるでしょう。

しかしそうは言っても、唯一の神の告白のもと、キリストの教会がたくさんの方々に分裂、闘争さえしている現実の有様は、和解の福音を担う教会にはふさわしくはありません。特に、世界の諸国民がさまざまな相違を克服しながら、まことの人類の一致と世界平和を希求して努力している現代、キリスト教会が自らの分裂を放置しておくことは、教会への信頼性を損ね、結果的に福音宣教の大きな妨げとなっていることは事実です。

そのような共通認識の下、20世紀初頭から具体的に結実していったエキュメニカル運動＝世界教会一致運動は注目に値します。この運動は、1910年のエジンバラ世界宣教会議を源流とするプロテスタント諸教会の超教派的な交わりでしたが、プロテスタント諸教会と正教会が加わる世界教会協議会(WCC/The World Council of the Churches)がこの運動に積極的に取り組み、やがてカトリック教会も第2バチカン公会議(1962年～1965年)を経てこれに呼応し、教派を越えた信徒レベルの対話や交流から、神学者たちをはじめ、教皇や総主教のような高位聖職者を交えた教派間の対話まで、様々な活動が行われています。

さて、わたしたちの教会は、世界の改革長老教会の交わりである「改革教会世界共同体」(World Communion of Reformed Churches)のメンバー教会として、世界教会協議会(WCC)の他、ルーテル世界連盟(LWF/The Lutheran World Federation)や聖公会世界共同体(The Anglican Communion)などとの対話や協力を通して、他のプロテスタント諸教会やローマ・カトリック教会、正教会などとのエキュメニカルな交わりに取り組んでいます。

もっとも、教会の一致(ユニティ)は、諸教会の画一的な統一(ユニフォミティ)とは違いますから、すべての教派がなくなるということはないでしょうが、どこまでも古代教会の告白した「唯一の、聖なる、使徒的な、公同の教会」(カルケドン信条)を目指して、具体的一致の努力は大切でしょう。その意味で、今日、教理的一致を含めた、さまざまな分野で議論と協力が進められていることは大切なことですし、分裂したキリストの教会にとっては大いなる希望です。

最後に、わたしたちの教会が「使徒信条」を告白しているゆえに、エキュメニカルな教会なのだという理解が一方にあります。しかし、厳密に言うなら「使徒信条」はローマに起源をもつ西方教會的な信条ではないでしょうか。すると、「使徒信条」を単に告白すればよいのではなく、真実なエキュメニカルな世界教会のひと肢としての告白とはどのようなものか、さらに考えていく必要もあることでしょう。新しい信仰告白を追い求める課題もそこにあります。

## VII. 使徒信条

### 11 我、信ず

「我は、天地の創造主（つくりぬし）、全能の父なる神を信ず。我は、その独子、我らの主イエス・キリストを信ず。・・・我は、聖霊を信ず」

「わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます。わたしは、その独り子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。・・・わたしは、聖霊を信じます。」

Q64 「我＝わたし」という信仰告白の主体は、だれですか。

A 「我＝わたし」とは、全世界、古今にわたって集められた主イエス・キリストの教会のことです。わたし個人もまた、この教会の信仰告白に同意し、それを自らのものとして、世々の教会と共に使徒的信仰を告白するのです。

マタイ16：16、18、Iテサロニケ2：13

Q65 「我は信ず＝わたしは信じます」と言うとき、あなたは何を意味していますか。

A わたしは、「使徒信条」に告白されている三位一体なる神の本質とその救いの働きを聖書の正しい信仰の要約として認識し、心から同意（承認）し、信頼を寄せているということです。このように、信仰とは、認識であり、同意（承認）であり、信頼に他なりません。

ヨハネ17：8、11：25～26/エペソ（エフェソ）4：13、

### 12 父なる神

「我は、天地の創造主（つくりぬし）、全能の父なる神を信ず。」

「わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます。」

- Q66 神を「父なる神」というとき、あなたは何を告白していますか。  
A 神は、わたしたちの主イエス・キリストの父ゆえに、キリストを信じる者たちの父となってくくださったということです。全能や天地の創造ということも、どこまでも父なる神としての御業です。

イザヤ43：1～3；46：3～4/マタイ23：9、ルカ12：32/ヨハネ1：12～13、  
20：17/ローマ8：14～16/ガラテヤ4：6

- Q67 神を「全能の神」というとき、あなたは何を告白していますか。  
A 父なる神が、すべてのものを支配する主権者として限りない力をもっておられるということです。この全能の父なる神のみ心なくしては一羽の雀も地に落ちることなく、またその髪の毛一本までも数えられるわたしたちの歩みにも、一つとして偶然なものはありません。そのように、神はその全能の力をもって、すべてのことをあい働かせて、万物を支え、神の国にむけて導いておられるのです。

イザヤ65：17、25/ネヘミヤ9：6/マタイ7：9～11、10：29～30/ルカ12：  
22～31/ローマ8：28

- Q68 神を「天地の創造主」というとき、あなたは何を告白していますか。  
A 神は、父としての全能の力をもって、天と地、すなわち存在する一切のもの、天の高みから地と海の深みにあるすべてのもの、見えるものと見えないもの、霊的なものから物質的なものすべてを、恵みにより無から創造してくくださったことです。

創世記1：1/詩編104：24/イザヤ45：18、44：24

## 13 子なる神

「我は、その独子、我らの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりてみごもられ、処女（おとめ）マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦難（くるしみ）を受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死者のうちより復活し、天にのぼりて全能の父なる神の右に坐し給ふ、かしこより来りて、生ける者と死にたる者とを審き給はん。」

「わたしは、その独り子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女マリヤから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府にくだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審かれます。」

Q69 「(そして、)我は・・・信ず」とはどういうことですか。

A 神とキリストが同格の神であることを言い表しています。しかも、そこには、神とキリストとの不可分の結び付きとともに、区別も同時に言われています。そのような仕方では、聖書は、唯一の神を、父なる神と子なる神と聖霊なる神という、「分離されず、混合もされない」、三位一体の神として告白しているのです。

ヨハネ10：30、17：8、13：13、20/I コリント12：3

Q70 「その独子」というとき、あなたは何を告白していますか。

A イエス・キリストは、神との関係において、唯一の神の子であり、このお方以外には神を啓示する方はいないし、イエス・キリストにおける神以外にどのような神もないことを告白しています。

Q&A 8参照。ヨハネ1：18、使徒13：33、Iヨハネ4：9

Q71 「我らの主イエス・キリスト」というとき、あなたは何を告白していますか。

A イエス・キリストは、人間との関係においては、わたしたちのキリスト、すなわち救い主となってくださったということです。この方を主とするわたしたちは、この方以外に聞き従う方はいないことを告白しています。

Q&A 6～8参照。マタイ16：16、マルコ8：29、ルカ9：20、使徒4：12

Q72 「聖霊によりてみごもられ＝やどり」とはどういうことですか。



A 神の独り子イエス・キリストは、聖霊なる神の自由な秘儀的働きによって、処女マリヤから、「まことの神であり、まことの人」（カルケドン信条）として、生まれたということです。このようにして、イエス・キリストは神でありつつ、まことの人間となったからこそ、神と人間の間立つ仲保者となることができたのです。

マタイ1：18、20/ルカ1：35//ガラテヤ4：4/1テモテ2：5/ヘブル（ヘブライ）9：15

Q73 「処女マリアより生まれ」とはどういうことですか。

A イエス・キリストは、マリアが生きていた歴史におけるある特定の時間と場所において、一度限り生まれたということです。しかも、処女マリアよりとは、男性による一切の助力なしにということですから、イエス・キリストは、人間の歴史における男性中心の営みから免れた罪なき唯一無比な方として生まれたということです。

イザヤ7：14/マタイ1：18、19、25/ルカ1：26、31、34、35

Q74 イエス・キリストは、誕生から十字架の死に至るまで、この地上でどのような生涯を送りましたか。

A イエス・キリストは、誕生の後、ナザレ村で育ち、やがて洗礼者ヨハネより洗礼を受けた後に、神の国の福音を宣べ伝え、弟子たちを集め、罪人や貧しい人の友となり、病气の人をいやし、子どもたちを祝福しながら、神に対して完全な信仰と愛と希望をもって、服従の生涯を送りました。

マタイ11：4～5//マルコ1：9、14～15、3：13～19/、6：34～44、8：1～10、10：13～16/ルカ2：39～52、19：1～10/ピリピ（フィリピ）2：8/ヘブル（ヘブライ）5：8～9

Q75 「苦難を受け」とはどういうことですか。

A イエス・キリストの誕生から十字架に至るこの地上での全生涯は、十字架の苦難の生涯であったということです。イエス・キリストは、わたしたちの受けねばならない罪の苦しみの一切を味わい、全人類の上に下された神の怒りと審判をその身に担われたので

す。

イザヤ53：4～5/マルコ8：31/ヘブル（ヘブライ）2：9～10/

Q76 「ポンテオ・ピラトのもとで」とはどういうことですか。

A イエス・キリストの苦難はポンテオ・ピラトがローマ総督として生きた時代に起こった歴史的事実であることを示します。それは同時に、ピラトという皇帝や国家の権力を担う者が下す正式な裁判で罪人として裁かれたということです。その意味で、キリストの死にはユダヤ人だけでなく、異邦人も等しく責任があるということを示しています。

マルコ15：1～15/マタイ27：11～26/ヨハネ18：28～19：16/I テモテ6：11～13

Q77 「十字架につけられ」とはどういうことですか。

A イエス・キリストは、残酷で屈辱的な極刑である十字架刑によって処刑されたということです。それは、旧約聖書によれば、神に呪われた者の死を意味していますが、そのように、イエス・キリストは罪人の罪の裁きの厳しさを、ご自分の身に引き受けてくださったことを教えています。しかも、この処刑はローマ帝国が政治的犯罪人に用いた処刑方法ですから、王の王、主の主であるお方を、この世の王や主でありたい皇帝や国家の転倒した権威をもって殺害したということも暗示しています。

申命記21：22～23/ガラテヤ3：13～14

Q78 「死にて」とは何を表していますか。

A イエス・キリストは、十字架上では死ななかったとか、直ちに天に昇られたというのではなく、本当に死んだことをはっきりと語っています。このイエス・キリストの十字架の死が、わたしたち罪人の「死の死」（ルター）となって、救いがもたらされるのです。

ヨハネ19：30、38～42/ヘブル（ヘブライ）9：15/I ペテロ（ペトロ）3：18

Q79 「葬られ」とは何を表していますか。

A イエス・キリストは、仮死状態ではなく、完全に死んで、墓に納められたことを示しています。しかも、キリストが墓に入れられたゆえに、墓に入れられるすべての人間の命の希望となったということです。

マタイ27：59～60/ローマ6：4

Q80 「陰府にくだり」とはどういうことですか。

A キリストは、神に見捨てられた罪人の住まいであると考えられた陰府や地獄にまで降るほどに、わたしたちのために徹底的に身を低くし(卑下)、それによって神も希望もない罪人の審判を完全にその身に引き受けてくださったということです。それゆえに、今やわたしたちは罪のゆえに見捨てられる苦しみと不安から全く解放されているのです。

詩編139：8/ヘブル(ヘブライ)5：7～10/ I ペテロ(ペトロ)3：18～20、

Q81 「三日目に」とは、どういうことですか。

A 第一に、いかなる仮死状態も及ばない期間が過ぎたということであり、第二に、キリストの復活は処刑から数えて三日目という歴史的な出来事であることを表しています。第三に、金曜日に死んで葬られたイエス・キリストが、日曜日の朝に復活したということです。こうして、キリスト教会はユダヤ教会の土曜日の安息日規定を乗り越え、日曜日を安息日として守るようになりました。

マタイ27：62～28：6/使徒10：41～42/ I コリント15：3～8

Q82 「死者のうちより復活し」とはどういうことですか。

A 十字架上で完全に死に、葬られたイエス・キリストが死と陰府との力に打ち勝ち、死者のうちより初穂として復活させられたということです。この主の復活は、十字架の死が失敗や終わりを意味するのではなく、むしろ十字架の罪の購いによる救いの完成と勝利を表しています。

ローマ6：6～9/ I コリント15：20、15：55～57、

Q83 「天にのぼり」とはどういうことですか。

A イエス・キリストは、地上での使命を完全に終えて、天におられる父なる神のもとに帰られたということです。それはまた、わたしたちが天の故郷に帰るために、わたしたちのための場所を用意するためであり、同時に、父なる神とともに約束の聖霊を送って、地上における神の国の業を継続させるためでした。

マルコ16 : 19/ヨハネ14 : 2~3、16/ローマ8 : 34/ヘブル (ヘブライ)  
7 : 25/ピリピ (フィリピ) 3 : 20/コロサイ3 : 1~2/テトス3 : 6

Q84 「全能の父なる神の右に座したもう」とはどういうことですか。  
A キリストは栄光を受け、神と人間との間に立つ仲保者して全能の父なる神の主権を行使しながら、教会のかしら、世界の主として、とりなしの働きをしておられることを示しています

マタイ28 : 18/エペソ (エフェソ) 1 : 20~21/コロサイ1 : 18

Q85 「かしこより来りて」とはどういうことですか。  
A イエス・キリストは、やがて最後の審判のために再臨するということです。

マタイ24 : 30、26 : 64/マルコ13 : 26/ルカ21 : 27/ピリピ (フィリピ) 3 : 20/テトス2 : 13/ヤコブ5 : 8

Q86 「生ける者と死にたる者とを審きたまわん」という最後の審判は、恐るべきことではありませんか。  
A 主の再臨とその審判は、それ自体で自足せず完結もしない人間や世の有様を、神が決して放置なさらず、最終的に完成して下さるときです。従って、信仰者にとっては、神がこの世で解決のできない矛盾や苦悩に最終的な答えを出して下さる喜ばしい希望の時でもあります。

使徒10 : 42/ローマ14 : 10/ヘブル (ヘブライ) 9 : 27/黙示録21 : 3~4

## 14 聖霊なる神

「我は、聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交り、  
罪の赦し、体の復活、永遠の生命を信ず。アーメン」

「わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、  
罪の赦し、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。」

Q87 「(そして、)我は、聖霊を信ず」というとき、あなたは何を告白  
していますか。

A 聖霊は、三位一体の神の一人の人格として、神とキリストとともに  
崇められ、礼拝される神であるということです。

ヨハネ4：24/Ⅱコリント3：17、13：13

Q88 「聖霊なる神」の働きは何ですか。

聖霊は命の霊として、あらゆる被造物を生かし支えています。特  
に真理の霊として、わたしたちに聖書の真理を明らかにし、イエ  
ス・キリストを「主」と告白させます。聖霊はまた絆の霊として、  
わたしたちをイエス・キリストに結び付け、教会へと造りあげま  
す。聖霊はまた慰め主、弁護者として、弱いわたしたちを執り成  
し、常に励ましてくれます。

創世記1：1/詩編33：6、104：30/マタイ28：19/ヨハネ3：5、4：24、14：  
17、26、15：26、16：7～8、13～14/使徒1：8、2：1～4/ローマ5：5、8：  
14、26/Ⅱコリント3：16、6：17、12：3、12～13/ガラテヤ5：16/エペ  
ソ(エフェソ)3：14～19、4：1～3

Q89 「聖なる公同の教会」とは何ですか。

A 教会とは、神が、イエス・キリストを通して、聖霊によってご自  
分に属する者として選び召してくださった、全世界、古今にわた  
る、公同的＝普遍的な神の民の共同体です。この教会の頭イエ  
ス・キリストが聖であるように教会も聖であり、またイエス・キ  
リストが公同的＝普遍的な救い主であるように、教会も公同的＝  
普遍的なものです。

レビ11：44/Ⅱコリント1：2/エペソ(エフェソ)1：11～14/Ⅰペテロ

Q90 「聖徒の交わり」とはどういう意味ですか。

A 聖徒とは、過去、現在、未来に渡って、イエス・キリストの十字架の贖いによって罪が赦され、聖とされ、キリストの体の一枝としてお互いに堅く組み合わされている者たちです。

マタイ 8 : 11/I コリント 1 : 9, 30, 12 : 12~13, 30/エペソ (エフェソ) 2 : 14~19/ヨハネ 17 : 21~23

Q91 「罪の赦し」とは何ですか。

A 神が、わたしたちの罪を責めないで、裁くことをなさらないだけでなく、義と認めてくださることです。それは、わたしたちの何らかの功績によらず、ひとえにイエス・キリストの十字架の贖いのみ業を信じる信仰によって与えられる神の恵みです。

マタイ 26 : 28/ローマ 1 : 17, 3 : 28, 4 : 16, 5 : 15/エペソ (エフェソ) 2 : 8/コロサイ 1 : 14/I ヨハネ 2 : 1~2

Q92 「体の復活」とは何ですか。

A 神が、わたしたちの体を大事に考えて、終わりのときに栄光の朽ちることのない体として、個性を見失わない形で、復活させてくださるということです。この体の復活の希望は、死の現実と、栄光の体への憧れとともに、今の世にあってわたしたちに靈魂と身体、靈的生活とこの世の生活を二元論的に分離させないで、人間を全体的・総合的にとらえる生き方へと向かわせます。

I コリント 15 : 42~44/I ペテロ (ペトロ) 2 : 11~12/I ヨハネ 3 : 2

Q93 「永遠の命」とは何ですか。

A 神が、わたしたちを三位一体であるご自身の永遠の交わりへと入れてくださることです。

マタイ 25 : 34/ヨハネ 3 : 16, 6 : 54, 17 : 3/ローマ 6 : 22~23/コロサイ 3 : 3

Q94 「アーメン」とはどういう意味ですか。

A 「アーメン」とは、ヘブル語で「真実」という意味です。使徒信

条がこれまで述べてきた父と子と聖霊である三位一体である神の本質と救いのみ業に対して、これは真実なことですと認識し、承認し、信頼するとともに、この信仰にわたしたちも真実に応答して生きることを告白しています。

申命記 7 : 9 歴代誌上 16 : 36 / 詩編 106 : 48 / II コリント 1 : 20 / II テモテ 2 : 13 / I ヨハネ 1 : 9 / 黙示録 3 : 14

## 旧日本基督教会信仰告白(1890年)

我等が神と崇むる、主耶蘇基督は、神の独子にして、人類のため、その罪の救ひのために、人となりて苦を受け、我等が罪のために、完全き犠牲をささげ給えり。

凡そ信仰に由りて、之と一体となれるものは赦されて義とせらる。基督に於ける信仰は愛に由り作用て、人の心を清む。また、父と子、ともに崇められ、礼拝せらる聖霊は我等が魂に耶蘇基督を顕示す。その恩によるに非ざれば、罪に死にたる人、神の国に入ることを得ず。

古の預言者使徒および聖人は聖霊に啓迪せられたり。新旧両約の聖書のうちに語りたまふ聖霊は宗教上のことにつき誤謬なき最上の審判者なり。

往時の教会は、聖書に依りて、左の告白文を作れり。我等もまた、聖徒が嘗て伝へられたる、信仰の道を奉じ、讚美と感謝とを以て、その告白の同意を表す。

我は天地の造成者、全能の父なる神を信ず。

我はその独子、我等の主耶蘇基督を信ず。即ち、聖霊によりて胎られ処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトの下に苦を受け、十字架につけられ、死して葬られ、(陰府に下り)、第三日に死者のうちより復活り、天に昇りて、全能の父なる神の右に座し給へり。彼処より来たりて生けるものと死ぬるものとを審判たまはん。

我は聖霊を信ず。聖なる公同教会すなわち聖徒の交通、罪の赦、身体の復活、永遠の生命を信ず。アーメン。



## ニカイア信条(325年)\*

(信仰と制度に関する委員会訳 2002年版)

\*325年にニカイア会議において採択されたいわゆる原ニカイア信条にはアナテマ(呪詛)の項目があり、現代の教会の礼拝で告白するものとしてはふさわしくないので、ここでは381年にコンスタンチノーブル会議で修正された、いわゆる「ニカイア・コンスタンチノーブル信条」を載せることにします。

わたしたちは、唯一にして全能の父なる神、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主を信じます

わたしたちは、唯一の主イエス・キリストを信じます。主は、神の独り子、すべての世に先立って父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られたのではなく生まれ、父とおなじ本質であり、万物はこの主によって造られました。主は、人間であるわたしたちのため、わたしたちの救いのために天よりくだり、聖霊によって、おとめマリアより肉体を受けて人となり、わたしたちのため、ポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、父の右に座しておられます。主は、栄光のうちにふたたび来られ、生きている者と死んだ者とをさばかれます。そのみ国は終わることがありません。

わたしたちは、主にしていのちの与え主なる聖霊を信じます。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語られました。また、一つの、聖なる、公同の、使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための唯一の洗礼を告白し、死者の復活と来るべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。

ドイツ福音主義教会の現在の事態に対する神学的宣言  
(バルメン神学宣言) 1933 年

(2010 年信仰と制度に関する委員会訳)

ドイツ福音主義教会は、1933年7月11日の憲法前文によれば、宗教改革から生じ、等しく権利を付与され、互いに並び立つ告白教会の連合体である。諸教会の連合の神学的前提は、1933年7月14日に帝国政府によって承認されたドイツ福音主義教会憲法の第1条そして第2条第1項において〔次のように〕述べられている。

第1条：ドイツ福音主義教会の侵すことのできない基盤は、イエス・キリストの福音である。それは、聖書において我々に証しされ、宗教改革の告白において新たに明らかにされている。この福音によって、教会がその任務のために必要な全権は決定され、制限される。

第2条第1項：ドイツ福音主義教会は、諸教会（地区教会）で構成される。

我々ドイツ福音主義教会の告白会議に相集ったルター派、改革派、そして合同派教会、遊離し自由になった地域教会会議、教会総会、信徒グループの代表者たちは、次のように宣言する。我々は共にドイツ告白教会の連合体としてドイツ福音主義教会の基盤の上に存立する。その時、一にして聖なる公同の使徒的教会の主への告白が我々を共に結び合わせる。

ドイツの全福音主義教会の公衆の前で、この信仰告白共同体と、ドイツ福音主義教会の一致が重大な危機にさらされていることを、我々は宣言する。それは、ドイツ福音主義教会成立の最初の年にますます明らかになってきた、ドイツ・キリスト者という中心的になってきつつある教會的党派およびその党派により支持されている教會統治の教育方法と行動様式を通して、脅かされている。この脅威は、ドイツ福音主義教会を統合している神学的前提が、ドイツ・キリスト者の指導者・広報担当者の側からも、教會統治の側からも、見知らぬ前提によって、絶え間なくそして根本的に妨害され、無効にされているという事柄の中に存在する。これが通用するならば、我々の間で効力を発しているどの告白に従おうとも、教會は教會であることを終えることになる。それ故にこれが通用するならば、ドイツ福音主義教会も告白教會の連合体として内的に不可能となる。

今日この事態において、我々はルター派・改革派・合同派教會のメンバーとして、共に語るべきであるし、語らねばならない。まさに我々は、自ら各々の異なった告白に誠実であり、そして誠実であり続けたのであるから、我々は沈黙すべきではない。共通の苦境と試練の時の中で、一つの共通の言葉が我々に委ねられていると、我々は信じているからである。告白教會相互の関係にとってこれが何を意味しようとも、我々はそれを神に委ねる。

我々は、教會を荒廃させ、それによりドイツ福音主義教會の一致をも破壊する、ドイツ・キリスト者と現在の帝國教會当局の錯誤を目の前にして、以下の福音主義的真理を告白する。

## 第1項

わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ14:6)

よくよくあなたがたに言うておく。羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、(ヨハネ10:1、9)

聖書において我々に証しされているイエス・キリストは、我々が聞くべき、また我々が生においても死においても依り頼み従うべき唯一の神の言葉である。

我々は、この唯一の神の言葉の他に、また並んで、自らの宣教の源としてさらに別の出来事、力、人物、真理をも、神の啓示として承認できるとか、承認しなければならないといった誤った教えを退ける。

## 第2項

キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。(1コリント1:30)

イエス・キリストは、我々のすべての罪の赦しについての、神の慰めに満ちた語りかけであるように、同様の重要性を伴った我々の全生活に対する神の力ある要求である。彼によって我々に喜ばしい解放が与えられている。それは神を認めないこの世の拘束から、自由で感謝に満ちた彼の被造物への奉仕への解放である。

我々は、我々がイエス・キリストのものではなく、他の主のものである我々の人生の領域があるとか、イエス・キリストによる義認と聖化を必要としない領域があるというような誤った教えを退ける。

### 第3項

愛にあって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、（エペソ4：15、16）

キリスト教会は〔キリストにある〕兄弟たちの共同体です。この共同体においてイエス・キリストは、聖霊により、御言葉と聖礼典において、主として、今も働いておられる。教会は、その信仰、その服従をもって、またその使信、その秩序をもって、罪の世のただ中で、罪赦された罪人の教会として、自らがただイエス・キリストのものであり、彼の慰めと指示によってだけ、彼が現れることを期待して生きていること、生きていきたいと願っていることを、証ししなければならない。

我々は、教会がその使信と秩序のあり方を、自らの好みあるいはその時々により優勢な世界観が有する主義や政治的な主義の移り変わりに任せてよいというような誤った教えを退ける。

### 第4項

あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あ

あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、(マタイ20:25、26)

教会の様々な職務は、ある人が他の人々を支配することを根拠づけるものではない。そうではなく、全会衆に委ねられ命じられた奉仕を行うことを根拠づけるものである。

我々は、教会がこの奉仕から離れて、支配する権能を付与された特別な指導者に自らを委ねたり、委ねたままにしておくことができるのか、してもよいというような誤った教えを退ける。

## 第5項

神をおそれ、王を尊びなさい。(1ペテロ2:17)

まだ救われていない世界、教会もまたその中に存在する世界において、国家は、人間的な認識と人間的な能力に応じて、力による威嚇とその行使をなしつつ、法と平和のために配慮するという任務を、神の命(めい)によって有していることを、聖書は我々に語っている。教会は、このような神の命(めい)による恵みを、神に対する感謝と畏敬の念を持って承認する。教会は、神の国をまた神の戒めと義を思い起こさせ、そのことにより、治める者と治められる者の責任を思い起こさせる。教会は、神がすべての事柄を支え導く御言葉の力を信頼し、従う。

我々は、国家がその特別な委託を超えて人間生活の唯一のまた全面的な秩序となり、[教会に代わって]教会の使命をも果たすべきであるとか、果たすことができるという誤った教えを退ける。

我々は、教会がその特別な委託を超えて国家のような性格・任務・威厳を身に付け、そのことによって自らを国家の一機関になすべきであるとか、なることができるという誤った教えを退ける。

## 第6項

見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。（マタイ28：20）

神の言はつながれてはいない。（2テモテ2：9）

教会への委託、そこにこそ教会の自由の基礎が置かれている教会への委託は、キリストに代わり、それゆえに説教と聖礼典を通してキリストご自身の御言葉と御業への奉仕において、神の自由な恵みの使信を、すべての国民に伝えることにこそある。

我々は、教会が人間の独断で主の御言葉と御業を、何か勝手に選ばれた願い・目的・計画に奉仕させることができるというような誤った教えを退ける。

ドイツ福音主義教会の告白会議は、これらの真理を承認し、これらの錯誤を退けることの中に、告白教会の連合体としてのドイツ福音主義教会の不可欠な神学的基礎を見ていることを宣言する。告白会議は、その宣言に賛同しうるすべての人々に、その教会政治的決定に際して、この神学的な理解を忘れずにいることを求める。そして、関わりあるすべての人々が、信仰と愛と希望の一致へと立ち返ることを願う。

Verbum Dei manet in aeternum（神の言葉は永遠に続く）

(註：聖書本文の訳は、聖書協会発行の口語訳聖書の訳を使用した。)